

「地球の裏側農場」黒字の実り



95%を輸入に頼る大豆の価格急騰と品不足で、国内の大豆加工食品メーカーが「廃業の危機」を訴えている中、市民の出資でアルゼンチンに農場を取得し、大豆の生産・輸入を手がける岐阜県美濃加茂市の企業「ギアリンクス」(中田智洋社長)の取扱量が急増し、経営が軌道に乗り始めた。

大豆を生産・輸入 美濃加茂の市民企業

今月まとまった9月期決算では、創業7年で初めての黒字となった。同社は、将来の食糧危機に備え、海外に安定的な供給源を確保する目的で2000年12月に発足した。岐阜県内の食品メーカーなど6社の経営者を中心となり、趣旨に賛同する市民から1口10万円の出資金を募り、最終的に478人から9990万円が集まった。この資金で、外国人による農地取得が許可されるアルゼンチンで、ブエノス



●アルゼンチンでギアリンクスが購入した農場で、大豆を手にする中田智洋社長(左端)●ギアリンクス農場開所式には、「食糧危機対策」という使命とロマンに共感した出資者たちも参加した(2003年10月)●いずれもギアリンクス提供

バイオ燃料ブーム

急騰・品薄 7年目の手応え

イレスの北にあるパラデーロ市など4か所に計1265haの農場を購入、現地の日系人に委託して大豆やトウモロコシの有機栽培を始めた。この間、中田社長はじめ6人の役員は報酬ゼロで、アルゼンチンへの出張もすべて自費だった。状況が変わったのは、原油高騰に端を発したバイオ燃料ブーム。エタノールの原料となるトウモロコシなどへの転作が世界的に進み、作付けが減少した大豆の価格が、この1年で約30%も急騰。食品用に使われる非遺伝子組み換え大豆の生産減少も重なり、日本豆腐協会など大豆加工メーカーは窮状を訴えている。「こんな時こそ、わが社の出番。量は600トと全輸入量400万ト余のほんの一部だが、大手豆腐メーカーへの納入も始まった」と中田社長。この1年間の売上高は前期比約6倍の4270万円、税引き後利益も540万円と初めて黒字となった。やはり高騰している配合飼料用トウモロコシの輸入にも踏み切る方針で、あと1年で累積赤字も解消できる見通し。中田社長は「利益が目的の会社ではないので、利益が出れば、南米からの食糧の安定供給に役立たい。出資者もロマンに共感してくれている」と話している。